

2014年7月15日



第60号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その54

## ネルソン ムジングウワさん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.



ジンバブウェ中部の小さな町マシャバから未舗装の道路を30分ほど車で行ったところにあるシャシェ村に、2000年、ネルソンさんは入植した。イギリス系鉱山会社がダイヤモンドを発見した地域の住人の移転先としてこの地域の6つの農場を買い取り、農業指導団体としてネルソンさんが所属するAZTREC（ジンバブウェ伝統的環境保護者協会）にも土地を提供したのだった。

最初は、本当に何もなかったところだった。車が壊れるのではないかと思うくらいの道、でこぼこ道というよりは岩や石がごろごろしている道を行き、「ここだ」と言われて車を降りた場所は、どう見てもただの森だった。

ネルソンさんが得た土地は8ha。広いと思われるかもしれないが、年間降雨量が400mmから500mmで灌漑設備もない地域では、この面積があっても自給するのがやっとである。しか

もこの14年間で「雨がよく降った」と言える年は5回しかない。

最初の年は、1haだけ開墾した。切った木の枝でその1haを囲い、メイズ（とうもろこし）と雑穀を植えた。鶏を7羽、七面鳥を4羽飼ひ、切った木を並べて円形に囲った簡素な家を建てた。それから毎年1haずつ開墾し、今では隣に開墾した後、故郷に戻った兄の分もいれて10haを耕す。

4年目によく手に入れた牛も少しずつ増えて、一時は20頭を超す程になったが、病気や逃亡で何頭も失うこともあった。それでも淡々と毎日牛を追い、畑を耕す。

毎年、多品種多品目を植える。時間をかけて土地に合う種も見つけ出した。ここ数年は、穀物の種は完全に自給できているという。世界的に有名になった天文学的数字と言われたジンバブウェのハイパーインフレーションのときは、国のあちこちから話を聞きつけて種を買いに来た人たちがいた。2人の子供を親戚に預け、上の娘を大学に通わせる。

1970年生まれの43歳。1999年来日して柳川さんや石井さんの畑を訪問したAZTRECのゴネセ氏（2011年没）の一番弟子。彼の思想である『内発的発展』とその実践を受け継ぐ第一人者である。地方の農業大学を卒業後、白人農場でハイブリッド種の種生産テストに従事した経験も持つ。その後、欧米系のNGOで仕事をしていた時にゴネセ氏に会い、のちにスタッフとなる。

この国では、有機農業は貧民の農業と揶揄される。皆、金があれば化学肥料や農薬を買いたいのだ。最先端の農業技術を学んだ彼が有機農業に転換したのは、自然を破壊しないからという理由だけでなく、父の影響が大きい。農業も父から教わったが、その父は色々な農業資材を買ってきて「化学肥料を買ってきたことは一

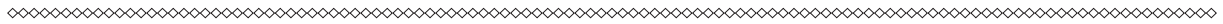
度もなかった」という。勤勉な人柄も父親譲りで、子どもの頃、毎日ひとつずつ石を持ってきて登校し、生徒みんなで小学校の校舎を建てたというのが自慢だ。

「農業は裏切らない。自分の努力次第で成果が出る。自然は厳しいがこちらの工夫次第で乗り切って見せる」と豪語する。

2011年に、ビア・カンペシーナ（LVC）と彼や村の人が参加するZIMSOFF（ジ

ンバブウェ小規模有機農業者フォーラム）が交流を持ったのを機に、今年からZIMSOFFが受託したLVC国際オフィスの事務局を担う。思いもかけず愛妻や畑と離れて首都ハラレでスマホ片手にパソコンに向かう日々を送るが、この世界とのつながりをどう自分たちの農業に活かせるか、それが重要だと話す。当分は世界中から訪問者を受け入れ、同時に自分たちの農業を世界に発信する裏方の仕事が続くそうである。

（尾関葉子）



## 実験村年次寄り合い開催 地域で増える太陽光発電

新事務局長の佐々木希一さんを選任

第何回目になるのか忘れてしまいましたが、4月5日、地球的課題の実験村の年次寄り合いが現地の「夕立の森」で開かれました。

麦大豆畑トラスト、北総大地夕立計画、地域自給のエネルギーの三つのプロジェクトと対外的な活動についての報告と活動計画を討議し、空席となっていた事務局長に若手（笑）の佐々木希一さんを選任、無事終了しました。

討議では、それぞれのプロジェクトについて、参加者を広げ、活性化する必要性が話し合われました。またエネルギーでは地域で太陽光発電に取り組んだり計画する人が増えてきてることが報告されました。また、今回の年次寄せには、山形・置賜おきたまから菅野芳秀さんと幸子さんが参加。菅野さんからいま置賜で地域挙げての取り組みが始まっている「置賜自給圏構想」について報告してもらいました（本号別掲）。

（大野和興）

※年次寄り合いは13回目です。



### 事務局長に就任して

「事務局を引き受けてくれませんか？」という電話をいただいてからもうずいぶん経ちましたが、この5月に地域での世話役がひとつ御役御免になりましたので、お約束どおり事務局を担わせて頂くことになりました。

寄合の時も話したのですが、実験村の運動は、かつて政治を偏重していた時代の闘争とは違う発想で、次代の価値観を追求する運動だと思います。とは言いながら、これまであまり熱心とは言えない「村民」でしたので、皆様に助けを頂きながら、とにかく実験村の足を引っ張らないように頑張ろうと思います。よろしくお願ひします。

（ささき・きいち）



# そこにある資源を再発見し、豊かな地域をとりもどす 動き出した置賜自給圏構想

今年4月12日、山形県<sup>よねざわ</sup>米沢市に山形県南部、<sup>おきたま</sup>置賜地域の米沢、<sup>ながい</sup>長井、<sup>なんよう</sup>南陽の三市と川西、<sup>たかはた</sup>高畠、<sup>しらかた</sup>白鷹、<sup>いいで</sup>飯豊、<sup>おぐに</sup>小国の五町から首長やその代理、議員、県知事代理、地元選出国會議員といった政治行政関係者のほか、農家、農協など農林業関係者、生協、医師会、歯科医師会、福祉関係者、飲食や農産品加工、温泉旅館、商工会、地元大学や農業高校関係者など、地域の農と食、健康、環境などに関係する人や団体が集まった。「置賜自給圏構想を考える」会はこうして動き出した。

ここでいう「自給圏」とはどのようなものか。ひとことでいうと、地域の農地や森、水など先人が残してきた豊かな地域資源を基礎に、循環型の地域社会をつくらうというものだ。民間と行政が連携し合いながら、具体的には、地域の農地や川、山からの恵みである農林水産物、森林資源や小水力による再生可能エネルギーを自給し、地域住民は安心して生活できる真の豊かさを実現する。循環のつながりは、直接的な食やエネルギー関連だけでなく、医療・福祉の現場や教育の場、産業や観光部門、地元商店や地域の産物の加工部門などを包み込み、地域を網の目のようにつなぐ。

この構想は、単に地域社会のあり方を示すばかりでなく、新しい経済のあり方を打ち出している。自給というと、停滞社会をイメージする人もいるが、置賜自給圏構想が打ち出していることは、決して閉鎖社会をつくらうというものではない。むしろ地域から世界に発信する新しい形のローカリズムをめざしている。

自給圏構想の柱は以下の三つだ。「地産地消に基づく地域自給システムの構築」「自然と共生する安全、安心の農と食を築く」「有機農業推進で『土はいのちの源』の視点にたった土づくりと産学連携を」。

この構想の提唱者は長井市の農民で置賜百姓交流会世話人の<sup>かん</sup>菅野芳秀さん。菅野さんは、全

国の市民・農民でつくる「TPP（環太平洋経済連携協定）に反対する人々の運動」の共同代表でもある。

菅野さんが自給圏を構想する背景には、地域の荒廃がある。置賜は最上川の上流部に位置し、周囲を山に囲まれた盆地で、きれいな水とその水を生み出す深い森林、盆地特有の日中と夜間の気温差など、コメをはじめとしておいしい農産物がとれる豊かな農業地帯だった。しかし、農村人口の高齢化、耕作放棄地の増加、増える空家といった現象が続いている。本来豊かなはずの農村地帯で暮らしと地域経済の疲弊をもたらしているのは、経済のグローバル化であり、今や交渉の大詰めを迎えているTPPが追い打ちをかける。安い農産物の流入による農産物価格の低落、兼業農家の雇用の受け皿だった工場の海外移転、大型店の進出と地域内の購買力の低下による商店街の衰退、などだ。

自給圏構想は荒廃する一方の地域を、本来そこにある豊かな資源を再発見し、地域内で循環することでもととの豊かさを取り戻そうという構想なのである。

それは社会のあり方を変えると菅野さんは語る。確かに、地方がその地域の資源をもとに食やエネルギーで自立し、その自立をもとに循環型の経済をつくって、それが横につながっていけば、権力と富の流れも変わってくる。

(村民：大野和興)



最上川の段丘 長井市



## 陽鶏発電所増設 20kwに

成田市東峰 樋ヶ守男

一昨年秋、ワンパック鶏舎の屋根につくった太陽光発電所ようけい—陽鶏発電所ふさのくに総州は、売電開始以来303日目で、当初見積もり1年分の12,648kwhをクリア。結局、1年目は14,451kwhを発電しました。そこで、更にもう一棟の屋根に、パネル54枚最大8.6kwをのせ、総計約20kwに増やすことにしました。福島原発事故でワンパックの無農薬野菜セットと一緒に卵も売上げが激減、年金転用型生命保険の保険金が払えなくなり、その解約金でつくった発電所です。が、この増設で「20年間の年金」がわりになりそうです。

木の根ペンションや陽鶏発電所の様子を見て、「俺もやるか」と、この2年間でまわりの有機農家や施設で5軒100kwの太陽光発電所ができました。設置工事はすべて埼玉県小川町の桜井薫さんの会社「エルガ」。今回は女性も含め7人が、木の根ペンションに2泊、3日間の工事でした。初日の5月28日には、地域の勉強会（めだか大学）仲間も一緒に夕食交流会。それぞれの生活や仕事のこと、電気のイロハから、2016年電力自由化の話など、おおいに盛り上がりました。

次は、地域の皆が少しずつお金を出し合いながら順番に自前の発電所をつくる、「市民共同発電」の仕組みづくりへのチャレンジです。

## 三里塚初ある記

吉岡照充

64歳になって初めて三里塚に行きました。5月17日に「ジンバブエ報告会」が木の根ペンションで開かれるという連絡を平野さんからいただいたので出かけてみました。

ジンバブエの旅に関してはいろいろ感じるところはありますが、平野さんに会えたことは大きいと思っています。支援の学生として三里塚に関わったんだと思いますが、そこで事業を起こして、たぶん雇用も作り出しているんだと思います。その辺のところに「志」を感じてしまいました。その平野さんの呼びかけなので出かけてみました。

1本遅れの電車で石井さんに不快な思いをさせつつ東成田駅の改札を出て思い出しました。ジンバブエの旅で、ケニヤカドバイの空港のひとけ人気のない地下通路のようなところを歩いたとき、石井さんや平野さんが「成田空港も出来た最初の頃はこんな感じだった」と話していたのを。よくよく考えてみると、地下鉄の地下通路なんかと変わりはないのだろうが、改札を出たとたん思い出してしまいました。そして成田空港が出来た頃は東成田駅が最寄の駅だったということを知りました。

行ってみないと分からない、動いてみないと感じられない。

また、木の根ペンションの報告会するとき、外を見るとフェンスの上に飛行機の垂直尾翼が見える。画像を見ている世界と飛行機の垂直尾翼、それが隣り合ってる世界。私にとって初めての世界、とっても新鮮だし不気味でした。



ペンションの垣根のむこうに垂直尾翼

# 写真報告 ジンバブウェ・シャシェ村 訪問記

平野靖識

2月11日から3月1日まで、アジア農民交流センター（AFEC）の旅でジンバブウェを訪問した。

案内はアフリカと日本の開発のための対話プロジェクト（DADA）の尾関葉子さんと壽賀一仁さん。同行はAFECの代表で農民作家の山下惣一さん、三里塚農民石井恒司さん、川崎で都市農業を営む吉岡照充さん、最近までフェアトレードに従事していた近藤康男さん、そして私平野。ほとんどが地球的課題の実験村村民で、さながら実験村の訪問団となった。

同国マシング州シャシェ村は1999年に有機農業による農村の自立を考えたコスマス・ゴネッセさん（故人）が、日本の農村各地を訪れ、三里塚にも立ち寄り実験村とも交流したが、その活動拠点であり、案内の尾関さん・壽賀さんが10数年その村づくりを見守っている場所だ。首都ハラレから南に350キロほど離れた、ジンバブウェ中南部、標高1000メートル以上の所にある。

ジンバブウェ共和国は面積39万km<sup>2</sup>と日本（37万km<sup>2</sup>）とほぼ同じ広さだが、人口は1372万人と日本の約10分の1である。人種構成はショナ人が71%、ンデベレ人が16%。その他アフリカ系が11%を占めるが、他にヨーロッパ系、アジア系も住んでいる。



（写真1）ジンバブウェとはショナ人の言葉で大きな石の家。岩と石、砂と礫がこの国の土質。ジンバブウェの農業はこの岩や石そして水不足とのたたかい。



（写真2）コピエの丘から見る首都ハラレの一角。ハラレとは眠らない街の意。独立闘争を通し、黒人も白人も夜通し眠ることなく番をしていたからだという。親族で助け合う習慣が強く、ジンバブウェには、一般的に知られているケニヤやフィリピンの都市にみられるような『スラム』はないようだ。



（写真3）コスマス・ゴネッセ氏の墓。マシング州の独立英雄墓地にある。国の英雄墓地に移そうという運動もあって、まだ墓誌は刻まれていない。左の2人はゴネッセ夫人と娘さん。



（写真4）シャシェ村。私たちの訪問の受け入れ組織AZTRECのセンターの宿泊棟（いくつもある）の中庭でくつろぐ。AZTREC（ジンバブウェ伝統的環境保護者協会）は1985

年に故ゴネッセ氏が組織した。90年に及ぶ白人支配で失われたジンバブウェの伝統や環境を取り戻し、身の回りにあるもので自立的な農業・農村を作り上げていこうとする活動。このセンターは、シャシェ・アグロ・エコロジー・スクールとも称し、シャシェ村全域の有機農業の技術伝習所となっている。2011年、センターは国際的な農民組織ビア・カンペシーナ (La Via Campesina) のワークショップを受け入れた。



(写真5) ゴネッセ夫人。センター集会室での交流で。ゴネッセ夫人は州都マシングゴの小学校の教師であり、アグロ・エコロジー・スクールの校長でもある。私たちのシャシェ滞在中は、全般にわたり心配りをしてくれた。



(写真6) センターにある種子保管庫第1号。ゴネッセ氏と尾関さんたちDADAは早くから種(特に在来種)の保管が自給的農業にとって不可欠だと考えた。村人たちははじめこのことの意味を理解していなかったらしいが、今では各戸がこれをまねて作りつつある。説明しているのはゴネッセ氏の息子のコンボレロ・ゴネッセ君(大学生)。



(写真7) ジンバブウェの農業は水不足とのたたかいでもある。雨水をいかに有効に利用するか、苦勞している。これは畑の等高線を割り出すA字型水準器。等高線に沿って畑に溝を掘り雨水をためて、しみだす水で下の段の畑を灌溉する。



(写真8) センターの農場でとれた作物。ラポコ(シコクビエ/中央コップに入っている)、左上から右回りにシュガービーン、ニモ(バンバラマメ)、落花生、ハラペーニョ(メキシコ産ペッパーの一種/害虫の忌避剤として使う)。シャシェではこのほかメイズ、トウモロコシ、ゴマ、ヒマワリなどを見た。雑穀中心。雨次第で出来不出来があるので、いろいろ作り、全体として一定以上の収穫を確保する。余分にできたものは換金して生活用品(衣類・石鹼など)を買う。



(写真9) ひまわりからの油絞り。20キロか

ら2リットルの油がとれるという。農産物の加工にも力を入れたいとのことだ。



(写真10) ムポフ家の居間で。中央背の高い人がムポフ氏。退職警察官で、いま8ヘクタールの農地をお手伝いし守っている。その右のムポフ夫人はZIMSOFF（ジンバブウェ小規模有機農家フォーラム）の議長として首都ハラレの事務所にいることが多い。同事務所はビア・カンペシーナの国際事務局であり、ムポフ夫人はそのコーディネーターでもある。



(写真11) ZIMSOFFの事務所で、しめくくりの交流。2000年から始まった農地解放の現状などについて説明を受けた。まだ5万所帯の農家が土地の配分を待っていること、土地占拠／政府の承認という形で始まった農地改革が男性優位であったことが見直され、監査の中で女性申請者にはあらかじめ何ポイントか与えられ是正されつつあるなどの報告があった。

各人の訪問記の詳細はアジア農民交流センター通信27号に掲載されています。

<http://www43.atpages.jp/afec0703/>

<<麦・大豆畑トラスト>>

## 体験しつつ食べる

島根純子

昨年収穫した小麦は粉5キロ、うどん20束という配分で送っていただきました。

小麦粉はお焼き、すいとん、てんぷらなどに使っていますが、特にお焼きは、御飯が少し残った時などによく作ります。同じ味では飽きるので、ナンプラーを入れたり、ピリ辛にしたり、味噌味にしたりして、具との組合せでいろいろ楽しんでいます。5キロの小麦粉も順調に減っているというわけです。

畑に通うことも長くなりました。自分が日常的に食べる物なので、現地の方々に“作っていただく”のではなく、都合のつく時には参加するようにしています。

種から収穫への流れを体験しつつ食べることをこれからも続けて行くつもりです。

## 麦・大豆のレシピ（その1）

西沢江美子

麦大豆畑トラストで収穫したせっかくの大豆、小麦粉を使いこなせないという声を聞きます。こんなヒントをどうぞ

### 【粉（全粒粉）】

体には良さそうです。昔風に言えば「フスマ入り小麦粉」。フスマは色があまり良くなく、口辺りが悪いので嫌われますが、繊維、ビタミン、ミネラルがいっぱい入っていて、食べないのはもったいない。あのフスマの茶色を生かせば、味は上等。

### ①てんぷらの衣

粉をとくのは水でなくだし汁で。揚げたらそのまま天つゆなしでいただく。こうすれば色も気にならない。

### ②お好み焼き

ネギ、キャベツ、ピーマンなど青色の濃い野菜を入れること。あの茶色がよりおいしく見える。

### ③パン、蒸しパン

パン用の粉にトラストの全粒粉を25%入れると、味もよし、膨らみも十分。

試してみてください。

## ロシアの市民農園《ダーチャ》を 訪ねよう！

5～7ページの報告のようにアフリカ・ジンバブエの農業を見学してきました。イギリス植民地時代からの大規模農業は存在しているものの、自立小規模農も存在していました。自分が食べていくためのものです。

佐賀の山下惣一さんは農のあるべき姿として自書のなかで「市民皆農」を唱えています。山形の菅野芳秀さんは周辺市町村と連携した地域自給圏構想に取り組み始めました。

ロシアでは、国内3400万世帯の約8割がダーチャなどの菜園を持ち、ジャガイモの国内生産の9割、野菜の8割を自給しているといわれています。

農業も大規模・分業化されていくなか、TPPに代表されるグローバリズムに浮き足立っています。さらに分業化が進み、大地や自然と切り離されていく時代になっていくのではと危惧しています。ダーチャ訪問の旅が、人びとの生活を見直し、商業化された農業を考え直すヒントになるのではと考えています。

ちょっと堅い話になりましたが、気楽にロシアの「農」を一緒に見にいきませんか？



### 【ダーチャ訪問の旅】

場所 ロシア・ウラジオストク郊外  
期間 8月28日(木)～8月31日(日)の3泊4日(予定) 金額 16万円程度  
一緒に行きたい方は、7月5日までに、石井恒司まで(090-9951-1449) ご一報ください。

## 活動予定

7月 5日(土)	麦大豆畑トラスト	大豆まき
	20日(日)	北総大地夕立計画 山仕事
9月	麦大豆畑トラスト	草取り
9月21日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
10月19日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
11月	麦大豆畑トラスト	麦まき

## ～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円 ※年3回

郵便振替 00140-3-92555

地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX：0476(26)1654 平野

メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

## 【編集後記】

「通信」の編集作業は、かなり久しぶりです。編集当日に「寄合の写真は無いの？」などとドタバタでしたが、「最強のPC技術者」山下さんのおかげで何とか年次寄合の報告の載った60号ができました。やっとひと息ついた思いです。(K)



■編集・発行／2014年7月15日「地球的課題の実験村」

■購読料／年間1,000円(年3回)

■60号編集担当／佐々木希一・平野靖識

■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22  
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4